

中国共産党をめぐる民族誌 現代中国における民衆の政治的行動と政治表象の社会人類学的研究

大田, 千波留

<https://hdl.handle.net/2324/4110580>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (人間環境学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 大田 千波留

論 文 名 : 中国共産党をめぐる民族誌 現代中国における民衆の政治的行為と政治
表象の社会人類学的研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本論では、現代中国の民衆社会（浙江省寧波市と広東省広州市）において、その中国社会主義イデオロギーが如何にとらえられているかについて観察し、彼らとその只中を明らかに抵抗するでもなく、しかし、完全なる支持でも迎合でもなく、“いかに生きているのか”という「民衆の政治的行為」の様相について論じている。民衆がその「中国社会主義イデオロギー」とどう向き合おうとしているのかについて、参与観察と聞き取り調査手法というエスノグラフィック的手法を用いて解釈学的アプローチをし、「中国社会主義イデオロギー」と「民衆の政治的行為」の相互関係を以下の視点から考察した。

「入党」という政治的行為に見る社会的資源としての「党员」（第2章）では、WGK大学(広東省広州市)とNHN大学(浙江省寧波市)の大学生の事例をもとに、共産党側が考える「党员」像と学生の「入党」という政治的行為が決して一方向的な営みではなく、共産党の理念を基礎としながらも、民衆には「党员」が社会的資源としてとらえられ、その認識をもつことで、入党が政治的行為として正当性を持ち、「よきこと」だと考えられている視点を明らかにした。「党员」であることが何か有用性を最初から持っているというより、彼らの生活世界に「党员」になる状態が世代を超えて再生産され、有益性が「党员」に付加され、それが積極的に取捨選択され、「党员になる」状態が再生産されていく。

「優秀」というラベルとその優位性（第3章）では、大学党組織は成績の良い優秀な人材が国家を担うための入党という政治的行為をし、国家に仕えるような専門職に就いていることを求め、それに呼応するような形で学生もその「優秀」というラベルを求めていくことをとらえ、「優秀」というラベルは内実よりもまずはラベルを貼ることに重きを置いていることを探ってきた。共産党がもともと必要としてきた「優秀」な人材と、現代社会での「優秀」の意味は相互に密接な関係性を保ちつつ、相互に異なった理解をされていると言える。「党员」であることは学生個人の生活実践における手練手管の豊かさに貢献しており、「資源」としての意味合いが浮かび上がり、それを活用しながら政治的領域が創られていることを示している。

社会関係を結ぶ形式としての「秘密」（第4章）では、入党プロセスや「党员」そのものが何か秘密を持っているかのようにとらえられ、社会と人をつなぐ行為のある形式として「秘密」を利用している在り様について明らかにした。そこでは装身具としての「党员」という側面を浮き彫りにし、民衆が敏感に権力との関係性を嗅ぎ取り、活用する政治的行為が見えてきた。「党员」というステイタスは目には見えないが、一種の装身具であり、そこに権力などの優位性を付加するものであると言えよう。

日常世界で「共産党」を生きる（第5章）では、飲茶という場で語られる政治に焦点を当て、共産

党と民衆の近接性をとらえた。それは「中国社会主義イデオロギー」を植え付けるという意味での近接ではなく、民衆が自らの生活を生きる上で、それと向き合ったりとらえなおしたりしている近接性であり、そういう意味で「民衆の政治的行為」の中でとらえられた共産党である。黨員であれ、非黨員であれ、家族の間であれ、中国社会においては「中国社会主義イデオロギー」が支配しているかのように見えながら、実際はそれそのものが有するものを、それが標榜するコードとして読み込むのではなく、民衆はそれを完全に排除しないが、自分たちにとって有利なものとして活用するという意味で資源としてとらえ、「民衆の政治的行為」を創り上げている。民衆にとっての「黨員」とは有利さを超えて、彼らの生活世界に根差しながら、民衆が創る政治的領域となっていく。

政治表象としての「毛沢東」と「民衆の政治的行為」の関係性（第6章）では、共産党側から見ると、1980年代、毛沢東は「理念」という形で「中国社会主義イデオロギー」として用いられ、またその理念を強化し、教授する上で記憶されるべきものとして語られ、記憶を想起させる装置として存在している。文革という誤りを犯した英雄は共産党によって批判され、手放しに偉人として称えられるのではなく、毛の良いところだけを選び取って、親しみやすさを付加し、「理念として新たな毛沢東」像を創り上げることに成功してきた。1990年代前半、毛沢東は「英雄」、「政治家」としての側面と、「人」や「芸術家」としての毛沢東という側面の二面性をもつ「人としての毛沢東」が描かれている。一方で、民衆はその共産党側の状況や改革開放、中国社会的市場経済などの社会変動との中で生じた不平等感や不安と対照させながらも、民衆のそれぞれの世代がそれぞれに「民衆の政治的行為を表象する毛沢東」を再評価し、そこにノスタルジアを感じ、時代ごと世代ごとに必要なモノを創造してきた。共産党によって神格化された「毛沢東」は共産党側と民衆側でそのとらえ方がズレながらも相互で「政治的英雄であり、尊敬すべき人物」であるという集合的記憶として形づくられてきた。共産党は「中国社会主義イデオロギー」の枠組として「毛沢東」を変容させ、民衆は「中国社会主義イデオロギー」から派生した感覚を民衆の「民衆の政治的行為を表象する毛沢東」として読み替えてきた政治的行為である。

以上のような視点から、「中国社会主義イデオロギー」を具現化する力をもつ中国共産党が一党統治をして厳然と存在している現代中国社会において、その只中を生きる民衆の政治的行為や生活世界では、民衆がそのイデオロギーに対する迎合でも支持でもなく、かといって抵抗でもなく、さまざまな政治的行為を駆使する中での非政治化の営みがあることを探った。それがまさに「民衆の政治的行為」としての側面を示しており、彼らがうまく「中国社会主義イデオロギー」を読み替えて取り込んだ非政治的領域であり、私的領域における折衝という政治的行為である。逆説的であるが、共産党がその民衆の政治的領域を容認することで民衆を統合する手段ともなり得ている。民衆内部でそれぞれがさまざまに受け取られ、受け入れられているが、それ自体がまさに「中国社会主義イデオロギー」と「民衆の政治的行為」の共存を支え、現在の共産党体制の支えともなっていると考えることができる。この「中国社会主義イデオロギー」の下での生活は、体制に同調する「共産党的日常」ばかりでもなく、支配者と被支配者という対立だけしかないような「政治的主体性のない日常」ばかりでもない。一見、曖昧な「普通の民衆」の日常のように見えながら、実際には消極的な(時には積極的な)同意、適応、順応、代替などの政治的領域の間を巧みに切り抜けていくような政治的行為を駆使する日常であった。民衆は共産党を標榜するコードとして「中国社会主義イデオロギー」をそのまま読み込むのではなく、それを完全に排除しないが、自分たちに有利や活用法や資源としてとらえ、「民衆の政治的行為」を創り上げている。